

博士論文（要約）

日本、トクヴィル、そしてアメリカ
——近代日本におけるトクヴィルの政治思想の受容

柳 愛 林

本論文は、明治・大正および昭和期の日本における、フランスの思想家アレクシ・ド・トクヴィル(Alexis de Tocqueville, 1805~1859)の政治思想を軸とした西洋思想の受容史に関する研究である。地域をこえて地球規模に広がる政治思想の相互影響のありさまと、一九世紀から二〇世紀にかけての変容を明らかにすることを試みる。

今日のグローバル化の原初形態ともいえる、「開国」期の日本社会における多様な思想の交流のありさまをトクヴィルの政治思想を中心に明らかにすることで、現代における社会と思想の変容を、歴史的な深みと、地域をこえた視野の広がりの中に位置づけて再考する。

まず、明治初期から昭和期に至る、近代日本の長い時期を包括的に対象とし、トクヴィルの政治思想がどのような形態で受容されてきたのかを跡づけたいと思う。従来も、トクヴィルの思想の日本への受容については、優れた先行研究が少数ではあるが存在する。だがそれらはいずれも一人の思想家の特定の時期の著作に限られた研究がほとんどであった。例えば、福沢諭吉の「分権論」に『アメリカのデモクラシー』が与えた影響に関する研究が代表的である。また、地方自治思想に関する研究のような特定のテーマに限られた研究がほとんどであった。

この論文ではそうした先行研究に関する反省をふまえ、自由民権の思想家から、明治期の地方自治論と宗教論、女性教育論まで、幅ひろい思想のテキスト群からトクヴィルの影を発掘する。また、今まで注目されなかった福地桜痴らの革命論にトクヴィルが与えた影響も取り上げる。そして、その時代による変化と、背景となる政治・社会の変容との関連を総合的に解明することがこの論文の目標である。

以上の課題を近代日本におけるアメリカ観の変化と関連させて研究する。『アメリカのデモクラシー』で知られるトクヴィルの著作は、日本においても西洋諸国においても、まずアメリカ論として読まれた。トクヴィル観の変遷をたどることは、日本人のアメリカ観という大問題に、思想史の新たな視点からとりくむことを意味する。

最後にトクヴィルの忘却についても研究する。トクヴィルは『アメリカのデモクラシー』の刊行と共にヨーロッパやアメリカで大きい注目を浴びるが、ある時期は完全に忘れられ、忘却される。このような現象が日本の思想界でも起こったことを証明し思想史やその受容史の普遍性と特殊性を明らかにする。

論文は主に三つの章で構成される。肥塚龍による最初の日本語完訳である『自由原論』を分析しその意義を明らかにする第一章、トクヴィル思想が多様な領域に受容されたことを「宗教

「女性教育」、「地方自治」などのキーワードを中心に明らかにした第二章、トクヴィルの「忘却」が日本にも該当することを証明しその原因を西洋のそれと比較分析した第三章である。論文の最後にはトクヴィルが言及され、彼の思想の受容の様子を分析するために使った文献のリストをつけておく。

第1章 『自由原論』

トクヴィルの『アメリカのデモクラシー』の第一巻が初めて日本語で全訳されて世に出たのは、ヘンリー・リーブの英訳を重訳した、自由民権派に属する肥塚龍の『自由原論』である。『自由原論』に使われた、政治思想上の諸概念の訳語の分析を通じて、日本の知識人が伝統思想の基盤の上で西洋思想を受容したか、その過程に見られる特徴について研究した。

まず、肥塚龍という人物について検討し、僧侶出身の自由民権運動家であった彼が特色のあるリーブの英訳本をどのように翻訳したかを評価した。『アメリカのデモクラシー』における重要な概念であるdemocracyやthe principle of sovereignty of the peopleなどを翻訳する過程で肥塚龍がどのような訳語を選択したのかを探ることで現代に至るまで「民主主義」や「人民主権」らの訳語がどう定着してきたかの一面を示した。

また、ジョン・スチュアート・ミルの『自由論』を訳した中村敬宇の『自由之理』が当時にも、今日でもよく読まれて研究されている反面、『自由原論』の知名度がなぜ低いのかを底本の『アメリカのデモクラシー』と『自由原論』の特徴を分析することで明らかにした。

『国会論』や新聞論説の「保釈論」、「非貧民救助論」などの肥塚龍の他の著作の中でのトクヴィル思想の受容の様子を検討し、自由民権運動家であった肥塚の思想にトクヴィルの政治思想が与えた影響を探り出した。

第2章 現実の日本、鏡のフランス、そして理想のアメリカ

この章では、『アメリカのデモクラシー』の主なテーマの中、いくつかを選んでそれを中心に明治初期のトクヴィル受容の様子を検討した。「宗教」、「女性教育」、「地方自治」の三つのキーワードに重点をおく反面、「革命」、「言論の自由」、「社会主義」などのテーマについても研究した。そして、これらのテーマに関するトクヴィルの議論が、どのような明治の政治的・社会的背景で受容されたかを検討し、近代日本人のトクヴィル観の変化、アメリカ観の変化に影響を与えたようすを明らかにした。

「宗教」の節では中村敬宇と、小崎弘道を含む日本のキリスト教指導者たちの宗教論に『アメリカのデモクラシー』におけるトクヴィルの宗教論が与えた影響について検討した。近代日

本のキリスト教の受容は「機能主義的」思考様式に基づいて行われるが、このような宗教への態度がトクヴィルのそれと類似していることを明らかにする。それと同時にキリスト教徒としての立場の差異が招いた「機能的等価物」構想の違いについても検討した。

「女性教育と女性の役割」では、トクヴィルの名前が直接言及される二つの著作『家庭叢談』と『家事要法』をまず検討した。それぞれ『アメリカのデモクラシー』の抄訳と、トクヴィルに影響されたプロトフェミニストであったビーチャー著作の訳書ではあるが明治初期の女性教育への高い関心度が分かる。また、トクヴィルの名は登場しないがその影響がうかがえる『明六雑誌』の男女同権に関する一連の議論も分析した。女性の役割に関わる伝統的思考がトクヴィルなどの女性観と接触してどう変容したのかを明らかにした。その中で中村敬宇の著作にみられる「性別役割分業論」が決して伝統思想にだけに基づいた前近代的、時代遅れの思考ではないことも示した。

「地方自治」はトクヴィル政治思想の受容史の研究の中でもっともよく研究されてきたテーマである。ここでは既存の研究がよく扱っている福沢諭吉の『分権論』をより緻密に『アメリカのデモクラシー』と比較分析した。また、時代の流れとともに、地方自治論を展開していく過程でトクヴィルの思想の受容の様子も変化してきたことを示した後、その背景には日本人のアメリカを含む西洋諸国への視座の変化があったことを明らかにした。

以上の三つのキーワード以外にも明治における言論の自由に関する議論、革命に関する議論でもトクヴィルの影を探り出した。出版の自由の場合、『アメリカのデモクラシー』の抜粋、抄訳である小幡篤次郎の『上木自由之論』を中心としてその時代に言論の自由論が持つ意義について論じた。「革命」や「社会主義」に関する文献では『アメリカのデモクラシー』ではなく『旧体制の大革命』や議会における演説が引用されている。明治維新をフランス革命と比較すること、革命や社会主義に対する危惧が読み取れることが興味深い。

第3章 消え去ったトクヴィルの影 -- 忘却と復権

トクヴィル研究で、ある時期忘れられたトクヴィル、つまり「忘却されたトクヴィル論」はほぼ通説である。第二章の研究のために文献を探してリストアップする過程で、この通説を日本でも適用できる可能性を発見した。日本で忘却されて行く過程、再び日本で注目され始まる過程を検討する。そして、それを欧米における忘却や復権と比較分析することで、地域を越える思想史の普遍性と特殊性を明らかにした。